

「……で、養子はどういう人なんだ？ 父さん」

「関原玲奈、という子だ。栄治の姉さんの存在になるだろうな」

俺、高田栄治は食卓で父さんと話をしていた。

養子縁組。親戚の玲奈という子が両親を事故で亡くしたらしく、それがきっかけとなり、我が家へ来る事となったのだ。

話は出ていたが、どういった人物かは全く聞いていない。

父さんが聞いたところによれば、事故で心を閉ざしてしまっただけらしい。

「玲奈は両親を亡くしているからな。そこを気遣えよ」

「わかった」

俺はごちそうさま、と言った後、自分の部屋へと行った。

数日後、家の前に一台のタクシーが止まった。

俺は緊張する中、父さん、母さんと一緒に玄関に立つ。

ドアが開いた。

「……こんにちは」

黒髪を腰まで伸ばした、とても綺麗な女性だった。

聞いた情報によれば、年齢は17で高校二年生。

一人で生活する事は難しく、施設に入りたくないそうなのでこうなったとか。

「いらっしやい」

「……よろしくお願ひします」

玲奈さんと俺が、初めて会った瞬間だった。

食卓に俺たち家族と玲奈さんが座り、ご飯を食べる。

「そういえば、玲奈さんって何か好きな食べ物でもあるんですか？」

「……」

俺の隣に座っていた玲奈さんは、すっかり口を閉ざしてしまった。

母さんが作ったご飯もろくに食べず、その場に座ったままだ。

父さんもそれを見て困り果て、仕方なくテレビをつける。

「明日は広い範囲で大雨となるでしょう」

玲奈さんはテレビ番組にすら目を向けず、その場ただ座っていた。

その目は悲しそうで、虚空を漂っている。

俺はその場にいられなくなり、廊下へと出た。

「……」

玲奈さんの悲しい顔は、見たくなかった。
初対面だというのに、その悲しい顔を見るだけで俺の
心が蝕まれる。

心が重くて、辛くて、悲しかった。

「……」

気がつくのと、前に玲奈さんが立っていた。

俺は笑顔を作り、玲奈さんに話しかける。

「部屋、行きますか？」

「……」

俺の作り笑顔を見抜いたのか、玲奈さんは申し訳なさ
そうな顔をした。

そして、かすかにうなづく。

俺は玲奈さんを連れて、二階にある自分の部屋へとこ
案内する。

勉強机にベッド。

俺の部屋にはそれくらいのものしかなく、漫画もあま
り読んだりはしない。

あるとしたら、最近ハマっている水彩画のセットだ。
大きなキャンパスを見た玲奈さんは、そこに書かれて
いる物を指差した。

「……綺麗」

「そう……ですか？」

タイトルをつけるとしたら、「どん底」だ。

全体的に濃い緑色で構成されていて、混沌とした感情
を表現させる。

まだ下手な俺にとって、綺麗と言われる事は初めてだ
った。

「……描いてもいいかな」

「いいですよ」

新しいキャンパスを用意し、玲奈さんに筆とパレット
を持たせた。

飲み物を飲みながら、玲奈さんは絵を描き続けていた。

「……出来た」

玲奈さんが描いた絵は、綺麗な海だった。

優しくて、厳しく、そしておおらかな海だった。

塗り方も上手で、海の波をうまく白で表現している。

奥に見えるものは、小さな島だった。

「……綺麗ですね」

「ありがとう」

玲奈さんは、少しだけ笑顔になった。

その笑顔を見ると、俺の心も解放されて自然と俺も笑
顔になる。

だがその時、外からバイクのエンジン音が響いてきた。

暴走族がこの周辺を走っているのだろう。

玲奈さんの顔は一気に暗くなり、その場で玲奈さんは
目を閉じる。

俺には何も出来ないまま、玲奈さんはその場に崩れ、泣いてしまった。

「……」

気がつく俺は、玲奈さんの右肩に左手を置いていた。

次の日の夕方、俺と玲奈さんは父さんを迎えに行くため駅に向かっていた。

外は天気予報通りの雨で、傘を差しながらそこへと向かう。

「……ねえ、栄治君」

「な、なんでですか？」

名前でいきなり呼ばれたから驚いてしまった。

玲奈さんは暗く沈んだ顔をしていたが、俺に少しだけ明るい声で言う。

「雨、栄治君は好き？」

「俺は……雨、好きだぞ」

「私も」

玲奈さんは、その時微笑んだ。

雨降りの嫌な空気の中、玲奈さんの周辺が少しだけ明るくなる。

それを見ていた俺は、また自然と笑顔になっていた。

「手、繋がらない？」

「えっ」

玲奈さんは自分の傘を閉じて、俺の傘の中に入ってき

た。

そして少し控え気味に俺の手と自分の手を繋ぐ。

「……こんな姉だけど、よろしく」

「よろしくな。姉さん」

そう言った後、俺と玲奈さんは顔を見合わせる。

その後お互いに笑い、どちらも同じ事を言った。

「今、姉さんって言った」